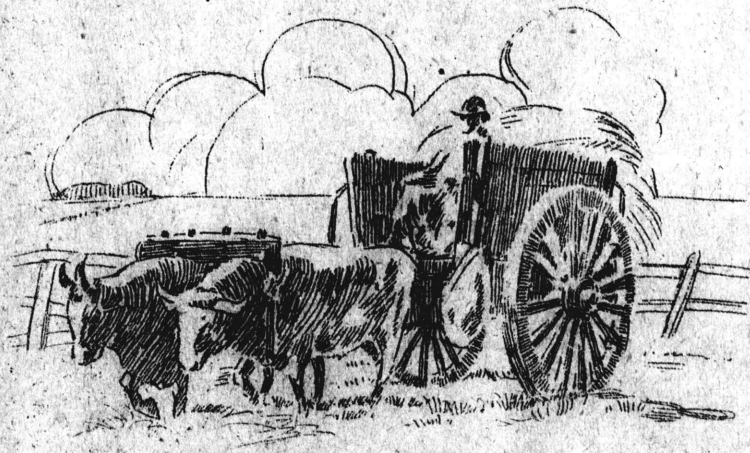


報時丁突尔亚

錄附藝文

号二世为

卷五第



FEB. 4
de
1930

SUPLEMENTO LITERARIO

AÑO V

Núm XXXII

“El Argentin Dijo”

小説『流浪』

狂自生

カッ正「トニイの時計は最早や十二時を過ぎてゐる。一としきり騒がしいホテルの雑音が終ると、客は次々に帰ら出した。

ペンパスの中程にある小さな町「アイ」の夜は静かである。外路を敷ける素見帰りのガウチヨ達の蹄の音も極く稀にかつて硝子戸に当る冷たい風が寒さと淋しさを誘ふてまた寂實が新しく押し寄せてくる。七月の寒空には青白い星が気味悪く光つてゐる。

「ああ、星が落ちた——流れた——何処へ——」

感慨深げうに星の行方を目を落した縁鳥は半かば無意識に冷たくなった「コーヒ」を飲み干して、深い沈黙に入るのであった。

「面長が顔と陰い鼻はともすれば不均等に作り易い東洋人の顔をよく調和して、どこか不潔な男の美しさの光輝の光りに反つて哀愁を添へてゐる。客は殆んど帰つては歸つて今居る者は「グレイ」橋の橋で伊太利語と西班支語の混同で盛んに熱を揚げてゐるへいれけに酔ッ掛つた伊太利人と今更入つて来た四五人の夜遊の帰りの若者達とだけである。

もう可成り遅い。モツンは眼をそうに「ア」と欠伸した。戸外には雪が降るの、冷たい風が吹いてゐる——七月の南部アルヘンチーナの庄田舎は、ほんた人の心を知る一種鋭い寒さと言ひ知れぬ寂實が人の魂のへいれけに入つて来るものである。それは丁度北海道の農村で冬季孤獨はすこすこ——様々淋しい悲しい気持である……

耐へ難い憂悶を忘れる爲めに盛々の母國を出立してから

「早やいものだ、半や四年に亘る。月日は幾多の様にすぎ、無意識の裡にも流浪の旅はつづく……今日はペンパスの場に明日はモンテの労働に、と羨望極りむき彼の生活を續いた。

草秋の夢に四年はすぎた。實際、縁鳥はこつては生をそののは一つの鉛毒としが思へなかつた。彼は更生への道を見すべく五十日の航海とあの薄暗い三洋船室のベッドでどれ程考へた事か？

甲板の上では何時も大勢のフラジル行きの移民達らつて耕地の証しや、金儲けの詔で何時も賑いで居た。早く成金に成つて日本に錦を飾りたいと言ふものや、ブーの大地主に成つて政卿の村長さんや驚かすふか、カク、無邪気な人達の顔を見る時、縁鳥は何時もより、惨めな自己を見出すのであった。

「何故……俺は皆んなの様に愉快になれなうたらう……希望が薄いで来ないのだからう、またどうしてあのK……の事が思ひ切れないのだからうか——」

皆んな希望に満ち、して美しい航海を續けてゐるのに何故俺一人だけ陰謀でも企んでゐるかの様に暗い愁のが去らふのか！ どうして明るい気持になれないのだからう……」

と何時も暗い顔をしてゐるのであった。

船はシンドポールに着いた。熱國の情緒、月夜に椰子の葉を縫ふて有動車でドライブした時は、流石に愉快であつた。思ひ出となるべきセイロン島の輝煌の古蹟や、珍奇なココンボの風習なども今の彼には何の思ひ出にもならなかつた。今日から愈々大西洋横断と云ふ南アフリカやケープタウンを發着時の思ひ出のみが今彼の頭に残つてゐるのである。

それは、南亞の排日に刺された憤怒でもなかつた。また天然の美景、ケープタウンの砂丘に——大陸を離れんとする——有の味う陸の誘惑を感じたのもなかつた。

事は何にさる……
今迄あれ程冷静に落ちついて来た勝弥の顔は根柢から
つくりかへられた。悪魔の様に固まらした彼は今や泥棒猫
の如くにおびえおびえおびえおびえおびえおびえおびえ
一歩一歩大地を踏みしめる様に歩いて来た彼の足はま
るで酔っ払いの様に宙に踊らま、眼がふりまわらま、
バラナ街へ折れた。そこも町の賑が、彼に耐えられな
かつたのだ。

昨日の夕方まで、屍体が絶対に見付かる筈だといと確信し
て来たさへ、どうやら危なくなつて来た。もう非常線が張ら
れてゐるかも知れない。
「さしず、道行く人——いや、それはかりじやない——街角の
窓まで、不審さうに彼を見つめて居る。
勝弥の顔はもう全く混乱してしまつた。
彼は、つがまへられおびえおびえおびえおびえおびえおびえ
胸にあせりながら、何処をどう曲つたのか、何丁歩いたのか
も判らぬ無我夢中で道を歩いた。
下宿へ着くまでに、捕まるかも知れない、もういよいよ駄目だ。
さう思ひながら彼の眼は或る町角の巡査の眼と、かと思
つた時、巡査はちやつと彼を凝視してゐた。——やがて何
が云ふが、彼の方へ此寄つて来た。
もう手づまつてゐる。さう考へた彼の足は殆んど無意識
のうちに町角を右へ曲つて走つて来た。
宿まで、あと二三丁だ。悪魔に追はれた様に、彼の足は早
かり出した。この場合、着きかへるか考へてゐる予備ふんか
彼には全くあつた。もうすぐそこを下宿だ。
然し、その四丁角にも又巡査が立つてゐる。
見知り越しの巡査ではあつたが、今夜は特にむつかしい顔
をして彼の方へよつて来た。そして何が尋ねた。
「貴様、未だ捕まるもんか？」
瞬間——彼は振り切る様に、駆け抜けて、下宿の戸口へ走りつ

いた。巡査があれはあせむ程、鍵がつかない。
巡査の手が、殆んど彼の肩に、つかり、さうして、彼は、
せり抜いた揚句、やつと開いた戸口から、脱走の如くに二階の
部屋へ駆け上つた。彼は、やつたりと、カマに倒れ伏した。
あれだけ、熟考に熟考を重ねて計画を立てたのに、ほんの
ちよつとした不注意から——たった一枚のバネエロから——
破綻が来やうとは——
長い間の、怒みをやつと、今、復讐したといふ、激怒もつづの間
人生五十年とした所で、未だこの先、四十年といふ一生を棒に
振つた事を、あきらめ兼ねて、彼は、叫んだ。
「ジー——」
突如——真夜中の静寂を、底から突透る様に、カエルトの叫鈴
が、家中へ響き渡つた。
「どうく、未だつかつた……」
彈珠仕掛けの様に、飛び上つた勝弥は、窓から街路を見下す
と、空の足、淡い街燈に照らされた巡査の姿。
「もう駄目だ。」
彼の眼前には、走馬燈の様に、未だ見えぬ荒涼たる「テララ」
デ・フェコ、終身監禁が展開された。
「ア、終つた、終つた。」
絶望的な、おびえ、喘息と共に彼の唇から、流れて、後、丁度一分
——不精無精、下宿のセニョーラが、玄関口に行つて、
鳴り響く銃声が再び静寂の闇を破つて、家内をふるはせた。

丁度その時、戸口では、夜半の二時に、アエルタが、開いたまゝに
打つてゐたのを、巡査が、注意された。セニョーラは、今しがた
あつては、ふじしたま、二階に上つた勝弥の不注意を、ブツクサ
巡査に、こぼしてゐた。
巡査は、巡査で
「あのハボネスは、酔拂つたのでせう。パントロンの下から、

瞬間——彼は振り切る様に、駆け抜けて、下宿の戸口へ走りつ

白いものを引きつりながら、所を走つて来て、私がそれを注意してやつたのに、返事もせずに家の中へ飛び込んでしまったんですからね、セニョーラ。

若い者には夜遊び、夜遊びには酒がつきものですから、うう、と、とりなし、顔にニヤク、人の善い微笑を浮かべながら話した瞬間、例のズドンと一発……である。

泡を喰つた二人は、いきなり二階に駆け上つて、恐ろしく、及び腰で、勝弥の部屋をのぞくと、彼が壁に添んで倒れてゐる。「キヤーン」と叫んで、セニョーラは逃げ出す。

職掌柄、此處は、そらく、部屋の中に入ると、兵隊の右足に、パンタロンのホルシージョが絡みついて落ちたらしい。パニエロが靴に引つぎ、つた儘、いかに何と彼の眼を射た。しかもその片隅に勝弥の名前が縫ひとりしてあるの處は、はつきりと……。「こりや、酔はらひじやなくて、可哀想に気が狂つたのじや、わい。」

善良な巡査は、そう考へた。
(おあり)

夜のマル・テル・プラタ

黒潮

さびれた黄色い月が、真黒な東の空に押し上げられる。暗にうわつていた波の姿が、くすんだ病的な影を映し出して来た。磯つたの、庭の家々の燈りが、ほのかる月の明かりさには、ほろりされるあたり、おぼろげな物象の形が浮んでゐる。木も家も、夜も、風も、無輪廓の不鮮明で、それらが森鬱な旅心地の後、一種の詩的を渡ぐまじさ、と誘ふ。

足下に重々しい力強さで、おしよせては、返す波のゆるやかなる、鼓動は、あへかふる過去の色々を思ひ出を誘ふ、文書体である。

三十に手のといた老青年の彼はもう、表面的な美しさや、注實とした幼影の華にひたる時代ではなかつた。人生を活の真、隠にふれて利己的の根づよい人生観が、経し、諦め、なげや、り、心の中に冷やせに抱かれてゐた。日頃は、目蓋された馬が、無惨な鞭の下にあへぎながら馳せる様に、生活の渦中に無、心な彼の心も、今こころして静かふる悠々の萬象に、心、觸れる時、胸をつきさす、さや、哀愁と孤独との観にとら、われるのであつた。

嗚び泣き、笑い怒り、
仄で、うたかたの如き、
は、か、ふ、い、生、命、の、心、く、動、である、
何れより、来り、何れに行く、
御前の、刻む、小さく、足、あ、とは、
磯、辺、に、う、づ、つ、蟹、の、穴、
よ、せ、て、は、返、す、波、の、
は、か、ふ、い、自、然、へ、の、争、闘、である、
人、生、三十にして、立つ、
妻、も、あり、子、も、あり、
人、間、の、か、む、べ、き、習、慣、は、
彼、を、人、と、して、形、づ、く、つ、た、が、
それは、唯、無、感、覚、で、
本、態、と、自、然、と、に、あ、や、つ、ら、れた、人、形、である、
ほ、う、は、く、と、し、た、海、の、波、う、に、
幸、あり、と、思、ひ、し、人、生、の、旅、人、よ、
何、れ、より、何、処、へ、か、行く、
砂、浜、に、残、す、足、跡、の、様、子、
は、か、ふ、い、人、生、の、業、に、
嗚、び、泣、き、笑、い、怒、り、つ、
暗、に、光、る、不、知、火、の、様、に、
は、か、ふ、い、生、命、の、心、く、動、を、つ、づ、け、て、ゐ、る、の、だ、。

詩

朝の憂鬱

丘谷啓一

王城の様に、
 フツキリと画き出された
 白壁の家。
 銀色に、
 エラメラと美しい
 幼色をはなつ
 風車。
 其れは俺の夢の中の可憐。
 葡萄畑は
 黒々と地をはか
 一房のその実は
 人間の血をすって赤くなる。
 其の薄し皮の匂ふに
 衆しい生のいとむなみ
 行はれてゐるだらうに。
 何んと血をすふて生活するもの、
 架しけを背よ。
 クネクネと
 煉瓦でつくられた
 階段をのぼる時
 彼は俺の様に、
 一本のしおを打ちむ
 きさばした。
 彼方はひろがった
 泥沼は

俺の嫌ふ蚊をつくる
 けれど、
 此の硬はった頬に
 カラカラと空虛の
 秋風景が
 パンパの彼方にも
 陽の照りそむる時だけでも
 少しは俺の心をなぐさめて呉れ。
 朝まだきは
 草も樹も
 横たふ牛の脊も
 一樣に
 異様な文字を急ぎまわら
 何処かの旗の様に
 赤々と燃えたつ。
 雀はまだ
 鳴かふいと云ふに、
 俺達の生活は
 また解りかへされて行くのだ
 あへまじから、
 只だ
 腐ったパンの様な
 死の恐怖を
 捨てられふばかりに
 濃ぐきに一分もの
 濃ぐたまつた様な
 憂鬱な朝。

詩 夜半の祈 伏舟

高慢よ
驕傲よ
小鳥の如く疵つきし吾が魂は
未だ癒えず——鉄に三日
そらに夜のフラサを独り歩む
星疎らに人稀れに
夜露身に秘みて淋し
ア、愛と謙遜に
生きんとする身
人生何を福多き！
うふだれて道世を想ひ
仰ぎて奮闘を叫ぶ
右すべきや
將た左すべきや
わが心迷へり
大、神よ
「わが心弱し」
弱くは強き力を與へ給へ
静に目を開けば
星斗また、きて人影なく
夜はしんく
更けて行く。
——一九三〇・一・二七——

歌 ちやみ 伏舟

高慢な友と話して濁り水呑みしが
如くむかつくわが胸。

Yと話して心濁りぬ大空に向いて
清き大気を吸はむ。

腫れにさわるが如く高慢の心いみつ、
Yと別れけり。

Yと語りて家に歸れば却屋ぬちは
思つまるらしい掃除せむ。

Yと語りし後の不快に垢つきし
思抱きてひねりす暮す。

尖りたる声もておれの胸をさす
君はまことに毛虫の如し。

夜のフラサを静に歩みしむくと
刺ある人と思ふ悲しみ。

口語詩 生々居る間は 北田 隼

生々居る間は
虚偽を吐いたり
欠伸を絞したり
空気を流したり。
虚栄をはったり
ごんち後か人間は
演ずる面化伏舟です。